

雪丘の狐狸兎の跡の自在なり雪蹴る力はじけて光る

高辻郷子

下句「雪蹴る力はじけて光る」は魅力的なフレーズ。

冬の朝らしい。雪の上に、けものたちの足跡が自在に散つ

爆發的な跳躍力を思わせる光り方の意味だらう。網走の

でいるのだ。「狐狸兎」はコリトと読むのだろうか。狐狸とは言うが、コリトは聞いたことがない。一応、第二

句九音で「こりうさぎのあと」と読んでみた。

こゑ・思ひ、沿のごとくに溜りぬむ隠し戸守る裏返

しの家

「裏返しの家」という表現、秀逸。アムステルダムの

アンネ・フランクの家に取材した作。私も訪ねたことがあるが、運河添いにあるその家は、表からは分からぬようには隠し部屋、隠し戸が作られている。まさに「裏返しの家」。

病院は前からそこにありしごと新月の夜に浮かびあがりぬ

松岡秀明

新築の病院である。あるいは「前から」は劫初から、の意味かも知れない。いずれにしろ、新月の夜の闇の中に永遠を思わせる感じで耀いているのだ。

夕光の透く菜の花の華やぎにうつすり時間の影の這ひくる

岡田恵美子

夕べのやわらかい明るさのなかの菜の花。そこに少しずつ夕闇が溶け込んでくる。そんなデリケートな光と闇の中間のそのまた中間のかすかな移行を表現しようどし

短歌の現在

No.399 今月の15首を読む

佐佐木幸綱

ている。「うつすり」（うつすらの意味）という古語を使つてレトロな雰囲気を持ち込んでいるのはいいが、この語、俳諧で愛用されたようで、私には俳諧のにおいが感じられていささか気になる。

近代化されたる白亜の屠殺場小高き丘に西日浴びおり

谷岡亜紀

丘の上に殿堂のように立つ屠殺場。ご存じのように、今は「屠殺場」を差別語を見るむきもあって、ふつう「と畜場」と言い換えたりしている。われわれ、肉は平気で食うけれど、牛や豚を肉にする現場は見ないようにして生きているのが実際である。この一首、そうしたわれわれの現在に向けての批評と読む。

われのほか人づ子一人ぬぬ畑に行方不明の放送流れ来る

鈴木恵子

無人の空間に流れる「行方不明の放送」。じつさいは、行方不明者をさがす放送なのだが、放送が行方不明になつたような奇妙な違和感が、地上から人間が消滅した後の地球のような、不思議な静寂を伝える。

歌誌の中ときおり隣り合うえにし秋田の人の歌を追いかいく

木多川夏

人生には、こういう縁もあるのだと思う。中学校でたまたま席が並んだ縁で一生の友人になるなんていうのはよくある話。「秋田の人」という具体的な地名が、一首に物語を呼び込んでいる。

光さす場所には影のあることを思えり竹林の道歩み